

## はなれのある家

千葉研究室 西川 拓



## ■ はなれのある家

今回提案する家は「はなれのある家」という名前がついている。

はなれとは普段の生活の大半が行われる母屋に対し、生活の変化に伴い必要になってくる+  $\alpha$  の機能を担う役割を持っている、母屋とは切り離されたもうひとつの小さな家のことを言う。



その周りには庭があり、庭は母屋とはなれが一体となって使われる時のつなぎの役割を持ったり、時にはそれらを分け隔てる溝のようなものになったりする。

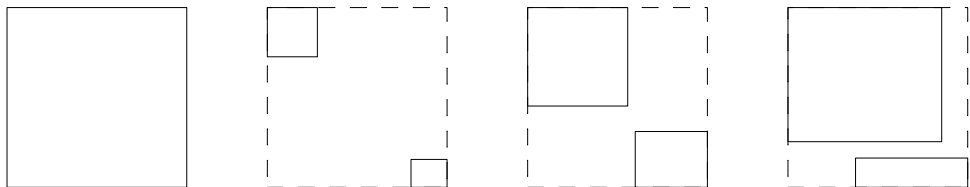
母屋とはなれと庭。「はなれのある家」にはそれらがひとつの家の中にある。

そうすることで、自分の家を大きな一体空間として感じたり、家の中に完全に切り離された場所があるという感覚を持てるような家を提案したい。

それは一軒の家を買うということを越えて、大きな公園を所有するような感覚であったり、遠く離れた家と別荘を同時に手に入れるという感覚に近いものではないだろうか。

## ■ ルール 変えないルール、変えてもいいルール

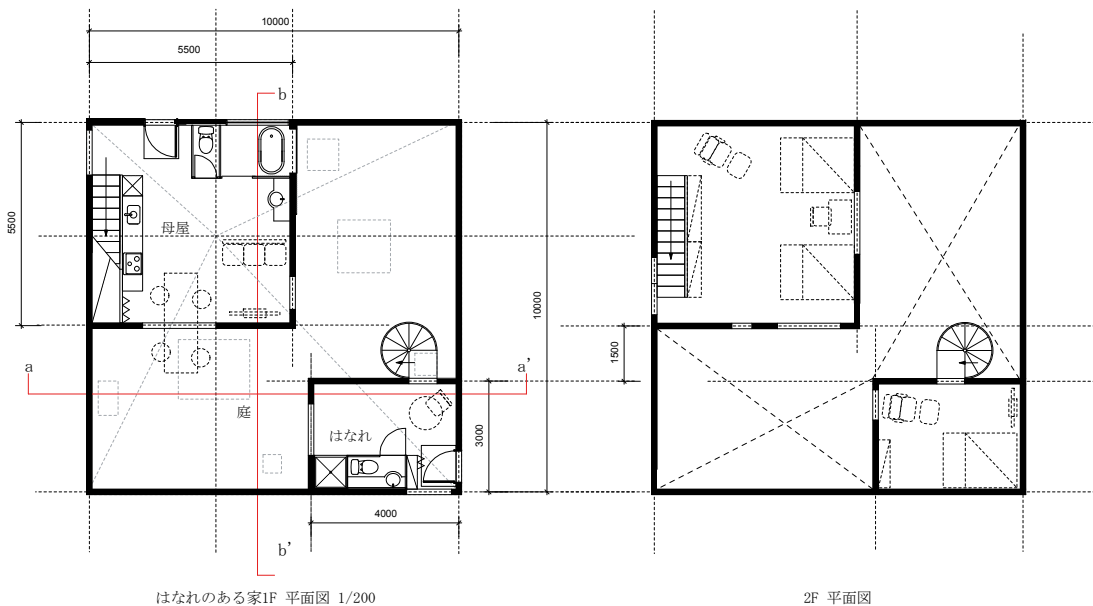
ひとつの家の中に二つの別々の家を建てる。それらはくつつくことなく家の対角線上に離れて向き合っている。」



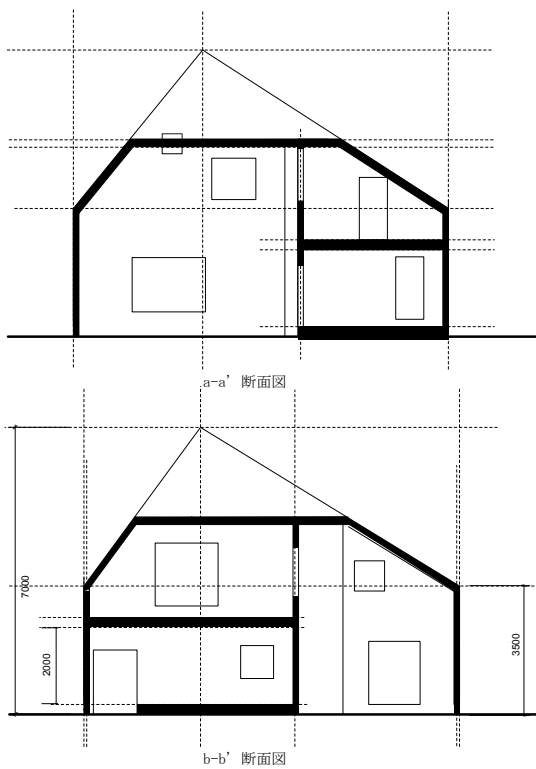
ひとつを母屋とし、もうひとつをはなれと名づける。はなれの大きさは単身者が生活できる大きさであるここでは設定している。

周りの大きさ、庭の大きさ、母屋の大きさ、母屋とはなれの離し具合などを変えていくと、はなれと母屋の物理的な距離が大きくなり、それぞれに応じて住まい方の選択肢は多く存在する。

## ■ 具体例



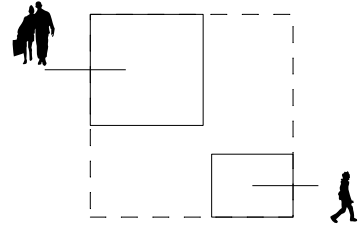
ひとつの家のなかに母屋とはなれと庭があることで、はなれと呼ばれている小さな家が、使われ方によっては部屋のひとつのように機能したり、または全く別の家のように切り離して使うような使われ方もある。



## ■ 生活シーン

### 三人家族の普段の生活例

母屋は両親二人のための部屋のように、はなれは子供一人のための部屋のように使われている。



二つの家の間にある庭の部分は二つの家(部屋)をつなげるリビングのような働きをして、家族がそろいほとんどの時間はこの開放的な空間に皆が集まる。また、食事をするときには大きなテーブルが母屋の窓をまたいでおかれることでダイニングにもなり、一つの家の中に三つの部屋が隣り合っているようになる。



団欒が終わるとそれぞれが自分の部屋のような家に戻っていき、それぞれの時間を過ごす。いままでリビングとして使われていた庭の部分を、今は外にある広場のように、部屋の中から眺めている。まるで外の空間を挟んで別々の家が向かい合っているようだ。

そして週末には、友人を招いてパーティーが開かれ、母屋とはなれの一階と、その間に横たわらんとした大きな空白のスペースは、この日だけ一体として使われ、一階が野外の大きな公園ようになる。



## ■ 展開

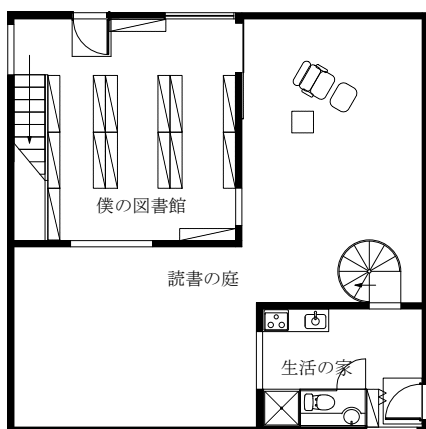
この家は、一つの家の中の二つの家があり、それらをどのように使うかで様々な住みかたが考えられる。

その一例として、「家族メンバーが変化しても豊かな家」を考えてみる。

現状の多くの家は、例えば子供が自立すると使われない部屋が出てくるなど、家族メンバーの変化に対応しきれないものが多いが、この家は将来家族の編成が変化した時にもその都度異なる魅力的な住まい方が発見されるだろう。以下いくつかの例を考えてみた。

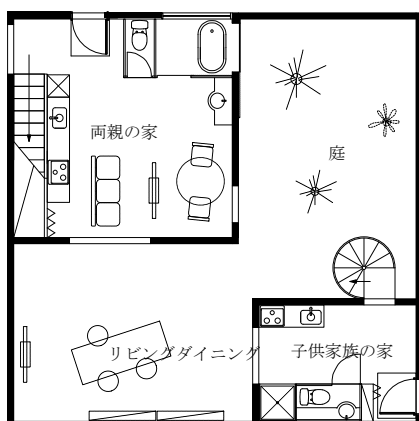
### 01 生活の家、趣味の家

昔は三人家族で使っていた家だが、今は単身で使っている。  
はなれで生活の大半を過ごし、母屋を趣味のための別宅のように使っている。



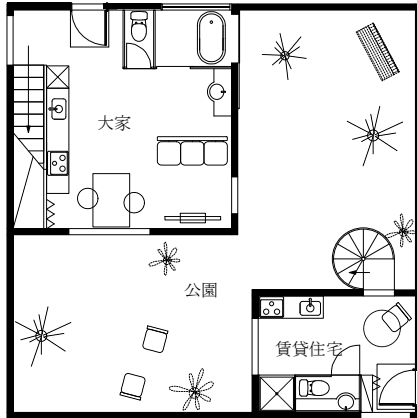
### 02 二世帯住宅

昔は三人家族で住んでいたが、子供が結婚し、親世帯と子供世帯でシェアするように住むようになった。親世帯は母屋を使い、子供世帯ははなれと庭の一部を部屋の一つとして使っている。



### 03 大家と賃貸

昔は三人家族で住んでいたが、子供が自立した。両親は母屋に引き続き住み、はなれを賃貸住宅にすることにした。今は近所にある大学の学生が住んでいる。



このようにもともと一家族が使っていた家を違う使い方に変えることで、はなれは家の中の機能から離れ、別の建物のように becoming。そうしてはなれが離れれば離れていくほど、間にある庭の部分は街にある公共の外部空間のようになっていく。

#### ■ まとめ

ここでははなれのある家について特徴をまとめる。

家の中に二つの家が庭を挟んで対峙している構成を持っていることで、ある時は大きなリビングに面した二つの部屋のように一体として使われたり、またある時は庭を挟んで向かい合う別々の家のように、はなして使われる。日常の変化という短い時間スパンから家族の変化など長い時間スパンにいたるまで多様な使い方に応じることができるという意味で、懐の深い場所であること、かつそれがシンプルな構成をとっているということで、この家を新たなプロトタイプと呼べるだろう。

なによりも、家の中に自分のものとしてあるものが、ある時ふとはなれて、遠くにあるものようになるという感覚、自分の家のなかに普段とは違って遠くはなれた場所があるという感覚自体をプロトタイプとしての価値としている点が、使い方やライフスタイルによってパッケージ化される従来の住宅商品には見られない特徴だといえる。